
魔法先生ネギま!? 雷蛇

妖精瞳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！？ 雷蛇

【Nコード】

N9498K

【作者名】

妖精瞳

【あらすじ】

世界が退屈だと思っていた少年が、邪神ロキに呼ばれた。チート能力をもらい、ネギま！？の世界へ。ネギの双子の弟となったアギ・スプリングフィールドはアンチネギを目指す。

プロローグ(前書き)

駄文ですが、よろしくお願ひします

プロローグ

・・・白い空間

「ふわぁー！。・・・む、此処は何処だ？さっきまで昼寝していたはずだが・・・？」

何も無い空間で、何処にでもいるような顔の・「やかましいわ！」
・少年が目を覚まし
あたりを見渡しながらそういった。

「気がついたか・・・。」
周りに誰もいないはずなのに何処からともなく声が聞こえた。

「・・・誰だ・・・？」
少年がそう言うと、少年の前に光が集まり・・・
糞生意気そうな・「・・・フツ」バキツ・・・し、少年が現れた。

「俺の名前は、邪神ロキ様だっ！！俺がお前を此処に呼んだ」

「ふーん」

「信じてねえのか？」

「いや、この状況考えたら信じるしかねえだろ。それよりなんで呼んだんだ？」

そう言うとロキは、つまらなそうな顔して

「ツチ！驚きも焦りもしないか・・・。まあいい。
お前を呼んだのは、俺の暇つぶしのためだ」

「暇つぶし・・・？」

「ああ。おまえは、お前は、この世界が退屈なのだろう？だからちようどいいと思ってな。」

お前に人間で言うチート転生を体験してもらおう。拒否権はないぞ。」

少年は、楽しそうに笑うと

「ハッ！！上等だ。拒否どころかむしろ感謝する。」

で、俺が転生するのは、何処の世界だ？」

「ハネギま！？」だ」

「そこか・・・。主人公が気に入らないんだが、原作崩壊OKか？」

「いい。むしろやれ。俺はハ混沌」だからな。能力は好きに選べ。叶えられるだけ叶えてやる。」

「そうか・・・」

なら、まず・・・ハ金色のガッシュベル」のガッシュとゼオンの術
アンサーカード
答えを出す者とアポロ・ジェネシスの天才的な勘

次に、ハGet Backers」の美堂蛮の、オウガバトル悪鬼の戦い時点
での技と身体能力、

邪眼は、1日3回ではなく10回で、超えても1日寝込むだけの
状態

三つ目に、魔力と気の世界リンクを可能にして、通常状態でネ
ギの魔力と気の3分の2ぐらい

四つ目に、不老不死

五つ目に、魔法と気の使い方、そして1000年も先の技術の
知識

最後に、時々お前と話せるようにする。このぐらいだな」

「わかった。一つ目の術は、頭の中に黄金の本がある形にする。五つ目ののは、

キーワードの検索式にしよう。」

「ああ。あと、ネギの双子の弟として転生させてくれ。一つ目の術は心ではなく魔力で使うようにしてくれ。最初はザケルだけを使えるようにして

強くなるたびに、術が増えるようにしてくれ。」

「前者はいいが、後者はなぜだ？」

「最初から全部が全部、チートじゃ楽しめねえだろ。」
少年がそういい、ニヤツと笑うとロキも笑い返して

「ああ、そうだな。・・・だがその転生の仕方なら、身体能力や不老不死はどうする？」
すると、少年は思案顔で

「そうだな。むう・・・よし！これすれば。

ロキ、村の悪魔襲撃の時に、公爵級の悪魔に「実験だ」とか言わせて本編開始1年前に

人間の体のまま不老不死になる時限式の呪いという名の能力付与をしてくれ。

身体能力はその呪いをかけられた副作用ってことで。」

「いいだろう。他にないか」

「ああ。もう何も無いな」

「なら行け。原作を壊して来い」
そう言つて、ロキが指差した方向を見ると綺麗な扉が見えた。
あれを、通れということだろう。

「いつてくるぜ。またなロキ。」
少年が素晴らしい、扉を開けようと取っ手をひねったら・・・
下に穴が開いて、落ちた

「は？」

「ハハハハハツツ!!! 仮にも俺は邪神だぞ! そんな綺麗なもの
で行かせるわけないだろ!!!」
落ちていく少年が最後に見たものは、悪戯に成功した子供のような
笑顔をした邪神だった。

「てんめえー!。覚えてやがれえー!」

第一話 悪魔襲撃

.....キングクリムゾン.....

- SIDE アギ

どうもアギ・スプリングフィールドだ。ただ今、3歳だZ E。

そろそろ悪魔軍団が来るなー。と思いつながら、村の近くの山奥で修行中だ

術がかなり増えて、現在9個だ。

学校では、落ちこぼれのふりをしてるが、最近校長の俺を見る目が怪しい、まさかばれてる・・・？ ま、そうであってもあの校長ならいいだろう。きにいつてるからな。

それより、もうすぐ悪魔がくるならスタン爺は好きだから助けたい、

いっちょ頑張るか

と言つてたのはいいが、修行から帰ると・・・村が燃えてました。チーン。

今日だったのかー、とか景気よく燃えてんなーとか
現実逃避していると、悪魔達がこちらに気づいたのか向かってきている。

とりあえず、ロキがきて呪いをかけたら俺は気を失う設定だ。

なので、ロキがくるのが早いか、俺がスタン爺を助けるのが早いかの競争だ。

「ザケルッ！」

威力はガツシユ初期とゼオンの間ぐらい、たいていの悪魔は還るが、それでも力の強いやつは残っている。だが、俺はそいつらを無視して村の方向に走る。

一時間ぐらい走っただろうか。たいていの奴をザケルやラージア・ザケルで

蹴散らしながら、村に入った。スタン爺とねかね姉が遠目に見えた。

――間に合ったか

・・・が、突然後ろからの攻撃を俺の勘が告げる。同時に避けられないともわかってしまった。

――ああ。ちくしょう。間に合わなかった。

「ラシルド!!」

「ザゲルゼム!!!」x2

俺は全力で防御の術を出しそれを強化するが、向こうは神からの攻撃だ。

当然、ラシルドは砕けてしまい、衝撃が俺に襲い掛かる。

俺の意識が朦朧とする。相手からすれば、格好の獲物だろう。

悪魔は、まるで台本を読むかのように詠う

「ふむ。われの攻撃を無傷ではないとはいえ、五体満足で防ぐか。」

――白々しい。てめえーがそうしむけたんだろう・・・

「ちようどいい。おまえを実験対象にしてやるう。

喜べ。成功すればお前は不老不死となる。」

そう言つと悪魔は、俺に手をむけ呪文を唱えだした

すると悪魔の手から魔法陣が出てきた。

俺の体に魔方陣が重なり、俺に激痛を与える。

「があああああああああああああああああああ」

俺は獣のような声を上げた

やがて、魔方陣は消え、俺は地面へと倒れ付す。

「ーこんな痛み聞いてないぞ・・

「ふむ。成功は成功だが、不老不死になるのは6年後か、なんとも気の長い効果だな。

だが、副作用かどうか知らんが、身体能力が圧倒的に上がっているし

魔眼・いやこれは、邪眼か？。とにかくお前は人間を超えたぞ」

「・・・は・・・消え・・ち・・まえ」

俺がそう言つと、悪魔「ーいや悪魔の姿をした邪神は

「うむ。私の実験は終わったし村のほうも終わったようなので還るとしよう」

さらばだ。もと人間で現人外よ」

ロキはそう言つと消えていき、俺は意識を失った。

「ー」再びキングダムゾーン「ー」

現在、俺はネギとともに卒業式だ。

・・・え？落ちこぼれなのになんで飛び級のネギと一緒にか？ってんなもんご都合主義だ。自分で考える。

あの後、俺は病院で目覚め、悪魔の呪いのことをネギ、ネカネ姉、校長の3人だけに話した。泣きながら、つらいか？ときかれたが全然、と笑い返してやった。

半年前に、呪いが発動しネギより、10cmほど高い状態でとまっていた。

ネギより高いだけましとするか。

ー卒業式後

「ネギ、あなたの卒業試験はなんなの？
見せなさいよ！」

「わわっ。ちよつと待って・・・」

「あ、出た。えーと 日本の学校で教師をすること・・・って
えー~~~~~!!!!!!」

「ちよつと！これどうゆうことよ!!
ネギが教師なんてできるわけないじゃない！」

「僕だつてわかんないよ」
・・・俺の前で、2人がパニくってるが、俺は柱に背を預けて目を閉じていた

しばらくすると。アーニヤが
「そっうえばアギ、あんたはなんだったのよ？」

と聞いてきたので。こたえてやった

「ん？ネギといっしょだ」

・・・ご都合主義乙

「へ。アギも僕と一緒になの？」

「んー？あんたは納得ね。教え方が的確でうまいし。

とりあえず、何でネギが教師か校長に聞きに行くわよ」

――校長室

ネギとアーニヤは、校長に丸め込まれてすでに退室している。
俺は、校長に呼び止められたため残っている。

「・・・で。なんのようだ？」

「そう警戒しなさんな。・・・おまえにネギを守ってほしいと思っ
てな」

(やっぱ、きづいていたかあ)

「なぜ俺なんだ？俺はネギより弱い落ちこぼれなんだぞ？」
あがきと思いつつも反論するが

「ふりはもうやめるのじゃ。お主が一般の魔法使い処か、並のマジ
ステル・マジより

強いと言つのは、わかっておる」

「やっぱりばれていたか。日本の学園のほうには・・・？」

「言つてはおらん。せいぜい、力を隠しておると言つたくらいじゃそれより。なぜ隠すのじゃ？」

「くだらん正義の押し付けから避けるためだ。

あとネギの件は、死にそうになつたら助けてやる
じゃあな」

「あ、待つの・・・

ボタンッ

俺はそついい捨て扉を閉めた。

第一話 悪魔襲撃（後書き）

（改）4 / 19 プチ魔王様、ご指摘ありがとうございます。
「6年前」を「6歳」と勘違いしてました。

第二話 始動（前書き）

文才が欲しいですー！ー！

駄文です

前回使った新たな術コーナー

『ザケル』・・・手から強力な電撃を放つ！！

『ラーシア・ザケル』・・・使用者の周囲を電撃が広範囲で覆う！！

『ラシルド』・・・長方形の盾を出現させ、電撃のおまけ付きで

攻撃を跳ね返す！！

『ザグルゼム』・・・電気のエネルギーを当てた対象に蓄積させる

！！

蓄積させた対象に電撃を加えればエネルギーが
爆発する！！

第二話 始動

――SIDE 学園長室

部屋には、この学園の魔法先生が召集できるだけの者達が集められている。

「むう。こまったのう」

「ええ。ネギ君はいいとしても、アギ君ぐらいの実力の子がきても危ないですからね。」

学園長がそう零すと、ガングロの青年――ガンドルフィーニがすかさず同意した。

「いやいや違うんだよ。アギ君は、力を隠してるそうなんだ。

だけど、それがどれくらいか向こうの校長も答えてくれなくてね、

わからないんだよ」

かなりの老け顔の・ニコツ・・・コホンツ、青年――タカミチ・

T・高畑が

困ったように苦笑して答えた

学園長は、アンケートのようなものを出して溜め息をつきながら言った。

「それにの、^ハ将来の夢^ハという質問に大抵の子供はマギステル・マギと答えるものを

(少数精鋭で万屋を開きたい)と変な答えを書いたのじゃ」

そのアンケートを見て、タカミチは引きつった顔で

「僕はその下の^ハ尊敬している人^ハの項目にある(某学園にいる口

リババア)

という回答が、此処にいるあの人を指してる気がするんですが・

「
』……………」
学園長室はそのまま沈黙に包まれた。

SIDE アギ

「「「きゃああああ！かわいいー」」」

…………俺は今、ネギを追っかけている女生徒たちの
後ろを付かず離れずで移動している。

なぜ俺は追っかけられていないのか？って？

フツ……。麻帆良に着いてから、今の今まで
気配を消していたからだ。

ハハッ。あの馬鹿、涙目で逃げてやがる。

さて、これからどうなのかねー

……………タカミチー！」

ん？いつの間にかタカミチが着ていたようだ。
とりあえず気配を戻して近づくとしよう
すると、タカミチがこちらを見た。

「アギくん、さっさと来てくれ」

「ああ。わかってるー」

S I D E タカミチ

「はい。高畑先生がそういうなら・・・」
ふう。なんとかネギ君とアスナ君が争うのを
止める事ができた。
早速学園長のところに行こうとしたら、アギ君がいないことに気が
付いた。

周りを見渡すとネギ君が来た方向に遠目にアギ君が見えた

「アギくん、さっさと来てくれ」

「ああ。わかってるー」

・・・本当にアギ君は力を隠してるだろうか？
確かに大人っぽくはあるが、そうとは思えない
まあ今はそんなこと関係ないか

アギ君が来た時にまたアスナ君とひと悶着あったが
現在、僕達は学園長室前まで来ている。

――後は、学園長に任せよう。

コン、コンッ

「失礼します」

S I D E アギ

・・・とりあえずネギ君は木乃香たちの部屋に住まわせてや

つてくれんかのう」

「「なっ!?!」」

「ええよー」

・ハッ!また意識が飛んでたぜ。最近多いなこついうの。
んで、今は、と・・・ふむ。部屋決めの最中か

「な、なんでこんな餓鬼と!部屋は余ってないんですか!」

「そ、そうですよ!」

「ええやん。この子かわええよ!」

「すまん。残念ながら部屋は余ってないのじゃ。嫌じゃろうが
世話をしやってくれ」

それを聞くと、明日菜はしぶしぶ

「まあ・・・。それなら仕方ないですけど」
と言い二人で部屋を出て行った。

ネギのほうが終わったので、爺いこちらを向いた。

「じゃあアギ君のほうはー」「別にいい。」「・・・むう?」

俺は含みのある笑みを出し、

「ネギが生徒の部屋に住むのなら、俺も自分のクラスの人たちに
頼んで住まわせてもらう。できるなら自分で選びたい。」

爺いは、俺が誰に頼むかわかったようだが、それでいいと判断した

ようだ。

「ふむ……。それなら断れたりしたらワシに言いなさい。
今日ぐらいは何とかしよう」

「ああ」

「うむ。では、もう教室に行きなさい」

「失礼しました(した)」

バタンッ

俺とネギは学園長室を出て行った。

第二話 始動（後書き）

（少数精鋭で万屋なのを開きたい）というアギの答えはまんま奪還屋の事を指しています。

アギ「なんか所々とはしすぎじゃね？」

妖精瞳「うん。正直かつたるいんだもん」

アギ「正直すぎるわ！」 ドコッ

妖精瞳「ぶべらっ!？」

アギ「もつとちゃんと書けや!!」

妖精瞳「めんどい所」キングクリムゾンでいいじゃん!」

アギ「うわ。手抜き宣言しやがった、こいつ」

妖精瞳「フツ。ハ飛ばし屋」の妖精瞳と呼んでもらおう」

アギ「二つ名を重ねてるようにしか聞こえねえーよ」

妖精瞳「では、次回の話の予定は!!」

アギ「こいつ、スルーしやがった」

妖精瞳「エヴァと接触&交渉、バトルまで行くかはわからん」

第三話 接触（前書き）

S I D E ??? はアギ以外の視点のときだけ使うようにします。
三人称の視点は、S I D E ; f r e e で表します。

第三話 接触

廊下

俺とネギは、シズナ先生に2・Aに連れてってもらっている。

「ぼ、僕に、た、担任なんてできるのでしょうか!？」

「……………っかこいつ、あわてすぎだろ。若干うざい。」

「ア、アギ、どうすればいいと思う?？」

「……………俺に頼ってきやがった、てめえーは飛び級の主席だろうが。殴りたくなってくる。」

「知るか。俺に聞くな、自分で考える」

「うううー(泣)」

突き放したら涙目になった。…………マジでうぜえー。

「だ、大丈夫ですよ!2・Aはみんな良い子ですから良くしてくれ
ますよ」

お、シズナ先生がフォローを

「……………多分」

できなかつたー!!!

「シズナ先生!多分って何ですか多分って!??」

「あ、着きました、此処ですよ」

「ええ!!!もう!!!」

ネギを深呼吸して、

「失礼します!!」
入って・・・

「・・・へ? ゴホッ!ゴホッ!ゴホッ!」
落ちてきた黒板消しを、障壁で一度とめて
そのまま被った。

本当に馬鹿じゃないのか?

「いやー引っ掛かつちやいマッ!ジッ!!ガッ!!」
全ての罨に引っ掛かりやがった・・・

「「子供—————!!??」」

「「かわいい—————!!」」

「「大丈夫—————!」」

ああ。ぎゃあぎゃあうるさい。俺は騒がしくなった教室に入り、
教卓を叩いた。

バンツ!バンツ!「うるさい。黙って席に着け」

シ—————ン

「「きゃああああ!!!!生意気でかわいい—————」」
さらに騒がしくなった。

ドゴンツ!! 俺は黒板を殴り(ちゃんと手加減シマシタヨ?)

ニコツと効果音が鳴りそうなくらいの笑みで

「俺は席に着けといったが?」

『は、ハイ!!!!!!』

みんなが席に座ったところで、俺はネギに首の動きで促すが、
・・・?って、首をかしげやがった
チツ・・・

「このクラスの副担任を務めることとなった
アギ・スプリングフィールドだ。一応まだ、正式なわけではない」
俺が言くと、ネギはハツとした顔をして

「お、同じく担任となったネギ・スプリングフィールドです
よろしくお願いします。」

『ええーーーーーーー!!!』

うぜえ。めんどくさくなった俺は、教室の隅にパイプ椅子を立て
推理小説を読み始めた。

インコーンカーンコーン

読書をしながら、見ていたが授業が終わった。

ネギがポカをやらかしまくっていたが、そんなのは些細なことだ。
俺は、生徒に話しかけられないように、教室から抜け出し
屋上に行った。

屋上

S i d e ? ? ?

くそっ！いらいらする。

弟のほうは、落ちこぼれときいていたから眼中になかったが、
学園主席と言われていた兄のほうでもあれか!?

魔法学園の質も落ちたもんだな!!

ガチャ

む?誰だ。

「あ。．．．．．なんでここにエヴァンジェリンがいるんだ?」

ツチ。弟のほうがやってきたか

「フンツ。何処にしようとするの勝手だ」

「はあ。．．．．．後で頼もうと思っていたが此処でも良いだろう。

おい。エヴァンジェリン」

「．．．．．何だ?」

「お前の家に泊めてくれ。」

「．．．．．は?」

「だから、お前の家に住まわせてくれって言ってんだ」

「断る!」

「おいおい。『闇の福音』とも」あろう者がけちくさいなあ」

何?．．．．．

「貴様、私が何者か知っていて、なぜ!??」

「理由は二つある。．．．．．」

ふん。．．．．．。どんなものが聞いてやろうじゃないか。

「言ってみろ、場合によっては許してやるぞ」

「俺はかなりの実力を持っているが、実戦経験がないのでな。

お前が持っているらしい別荘の中で、毎日時間いっぱい手合わせして欲しくてな?。」

何を言っている……?

「ふん。お前は、落ちこぼれなのだろう?」

「本気で言っているのか? 『闇の福音』。今、俺を前にして?」

「本気も何も、現に隙だらけじゃナツ!? ……」

「ほう。やっと気づいたのか」

「なんだこいつは……!? 隙だらけに見えるのに、攻撃の目がまったく見えん。」

「全てがカウンター狙いの、誘い込み型の隙だ。それを自然体でやって見せるとは、

何者なんだ、こいつは!?!? ……」

「おい貴様、実力があるのはわかったが、『別荘の中で、毎日時間いっぱい』とは、どういうつもりだ。」

「あっという間に成長してしまうぞ?」

「そうだな、普通ならば。だから、それこそが理由の二つ目だ」

「何が言いたい?」

「なにを、もつたいぶっているんだ。さっさと話せ」

「驚くなよ?」

「奴はニヤリと笑い、そして……」

「俺は、不老不死となっているのだよ!!!」

「……とんでもないことを言った。」

「な、なな何だと————!!!???」

第三話 接触（後書き）

だんだん遅くなっていくー！。

第四話 糾弾（前書き）

木乃香のしゃべり方がわからない。
つーか、タイトルの意味あるのか？

第四話 糾弾

「な、なな何だと――――！！！！？？？？」
エヴァンジェリンは叫んで、俺に詰め寄ってきた。

「まあまあ。落ち着けつて」

「落ち着いていられるか！！！！それより貴様、本気でやっているのか！！？」

「無論、本気だが？」

「どういうことだ！！説明しろ！！」
うるさいなあ……ん？。

「エヴァンジェリン少し黙れ。誰かが来る」

「ツチ！なら場所を変えるぞ。」

「いや。どうやら俺に用があるようだ。話はまた後でだ。」

「ツク！わかった。だが、後で必ず聞かせてもらうぞ」

ガチャ

屋上の扉が開くと、木乃香がやってきた。

「あ、アギ君此処におったんやね。」

「なにか用か？木乃香。」

「フン。用がないなら、さっさと帰れ」

「あら。エヴァちゃんもここにおったんやね。二人で何しとったん？」

「む。その、なんだ？サボリのすばらしさについて語ってたんだ。」
「適当なことを行ってごまかそう。」

「ふーん。そうなんか。だめやえ、先生がサボっちゃ。」
「わかってるさ。それより、本当に何のようだ？」

「ああ！実は、アギ君たちの歓迎会の準備ができたから呼びにきたんや。」

「そうか。じゃあ行くか。エヴァンジェリンもくるか？」

「ふん。たまにはいいだろう。」

俺たちは教室に向かった。

教室

『ネギ先生&アギ先生、ようこそー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』

「み、皆さん。ありがとうございます。」

「へいへい。」

うるさいのはいやなので、俺は、エヴァンジェリンと共に隅っこで料理を食い始めた。

「おい。アギ。」

「ん？何だ？？」というか、何でいきなり名前呼んでんだ？」

「光栄に思え。貴様を認めてやったんだ。貴様も私のことを愛称で呼んで良いぞ。」

そうかい。んじゃあ

「キティ」

「!!!なぜ、貴様がその名前を知っている!!!?」

「H A H A H A。なんでだろうね〜キティ」

「ええい、その名で呼ぶな!!!」

「で、なんのようだ?エヴァ」

「貴様はっ。……まあい。貴様の兄は、あれで学園主席なのか?」

エヴァの指差すほうを見ると、ネギがタカミチに読心術をかけていた。

あゝ。そついやあつたな〜そんなイベント。やばいな。

もう大きな所ぐらいしか覚えてない。

「あいつは魔法を勘違いしているからな。魔法使いは全員正義の味方と思っているし、

あれも違反行為だということすら知らない。兄弟なのがいやなくらいだ。」

「そ、そつか」

ありやエヴァが引いてる。そんなに低い声だったか。

そつ思っていると朝倉がやってきた

「ねえねえ先生、なんでエヴァちゃんとそんなに仲いいの?」

「仲……いいか?」

「うん。すくなくとも私達よりは多く話しているよ?」

そついやエヴァ、一匹狼だったなあ。

「それはな、さつき屋上でサボりのすばらしさについて語ってたか

らだ」

「あはは（汗）。先生なんだからさぼっちゃだめだよ」

「わかっているさ。さつき木乃香にも言われた」

「ウチがどうしたん？」

ひよこ

「うおー!!」

気配なく後ろに立つなよ。さすが凶険部

その後色々雑談して、エヴァに家の地図をもらい「後で来い」と言われて

現在階段にいるんだが

「ねえ。あんたも魔法使いなんでしょう?」

踊り場で、明日菜に問い詰められている。ネギは明日菜の後ろでオオ口している

「はあゝ。ネギ」

「ひゃ、ひゃい」

「ばれた経緯を、簡単に話せ」

「えゝと.....」

うん。原作通りだった。こいつほんつとーに馬鹿だな。

「一般人にばれた上に、未遂で終わったが独断での記憶消去、か。学園長に報告するぞ?」

「ええ.....!!」

「待ちなさい!私が黙っていれば済む事でしょ!」

「本気でそれだけだと思っているのか？」

「「え？」」

「神楽坂明日菜、ネギ・スプリングフィールド、学園長には報告しないでやる

だが一般人が、魔法を知ることがどういう事か、いずれ分かる事になるだろう」

そう言い放ち、俺はその場を去った。

さて、エヴァの家に向かうか。

第四話 糾弾（後書き）

登場人物 少なっ！！

第五話 説明（前編）（前書き）

主人公のキャラが定まらない

本文中の『知識の書』という名は、アギが説明しやすいように付けただけです

あれ？途中から、議題が摩り替わっているような気が・・・

第五話 説明（前編）

エヴァ宅前

エヴァにもらった地図を元に歩くと、豪華な家があった。
・・・実際に見るとすごいな

「いらっしやいませ。アギ先生」
扉の前に絡繰茶々丸が立っていた

「ああ。アギ先生というのはやめてくれ絡繰、私事の時に呼ばれると背中がかゆくなる。」

「承知しました。では、アギ様と呼ばせていただきます。
私のほうも、茶々丸とお呼びください。」

「わかった」

「マスターが別荘でお待ちしております」

俺は、茶々丸に案内され家へ入っていった。

S I D E f r e e

別荘

「来たか。さっそくだが、お前が言っていた『不老不死』がどういうことか

説明してもらおうか。」
エヴァがアギに問うが

「嫌だ。喋るのがめんどくさい」

「なにいいいー！ー！ー！ー！ー！喋るのがめんどくさいとは何だー！
き・さ・ま・は、後で説明するといってたろうがー！ー！ー！
」！

「落ち着け、エヴァにゃん。喋るより記憶を見せたほうが楽だから、
そういっただけだ」

「誰がエヴァにゃんだ！ー！ー！ー！」

「ああもう、うるせえ。叫んでないで、さっさと記憶見ろや」

「誰のせいだ！ー！誰の！ー！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに・・・」

・
・
・
・

しぼらくしぼ、

「ぜえぜえ。もういい、記憶を見せる」
エヴァはからかわれ続けて疲れていた

「とつとつと見やがれ」

・・・・・・・・・・第一話 参照

「まあ。お前の言ったことはわかったが、本当に不老不死なのか？」

「なにいつてんだ？記憶見たろ？」

「そうではなく、本当に呪いが発動してるのかと聞いているんだ」

「それなら大丈夫だ。剣で心臓を一突きしても死ななかつたから」

「・・・・・・・・・・は？」

「だから、剣で心臓を一突きしても死ななかつたんだって」

「・・・・・・・・・・あ・・・」

「あ？」

「あほかーーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

エヴァはアギに、こんなに声が出るの？と思うほどの声で怒鳴った。

「貴様は何をやっているんだ!!!!!!!!!!呪いが発動してなかつたらどうするんだ!?!」

「まあその時はその時で、（ありえないけど）」

「その時で、ではないわーーーーー!!!!!!!!!!!!!!」

「心配してくれんの、エヴァ？やぐさしー」

「し、しし心配などしとらんわー！ー！」

ドカッ

「ぶふう！？」

エヴァはアギを殴った

「うわ。ようじょッヲイ」

「誰が幼女だー！ー！ー！ー！ー！ー！」

~~~~~しばらくお待ちください。

「はあはあ。で、」

「で、ってなんだ。で、って」

「不老のほうは試したのか？」

「ああ」

「ほう。どうやってだ」

「その前に、俺の能力のひとつを教えてやろう。俺の頭の中には、『知識の書』ってのがあってな。内容は、固有技法以外の魔法、気の使い方

そして、今の技術を1千年ほど越える技術が詰まっている」

「……………貴様は、バグキャラだったのか」



「……………不本意だがその通りだ。

で、不老不死となった後、その中にあるタイムマシンを作ったんだが、

部品をひとつ入れ間違えてな。10年前に飛ぶつもりが、25年前に飛んだ上に

魔法世界のほうへ飛ばされたんだ」

「……………それで？」

「飛ばされたところの近くで女の子が攫われかけてて、それを助けたんだが

そいつの正体が、テオ……ヘラス王国のテオドラ第三皇女だったんだ」

「……………続ける」

「なんか、懐かれてな。俺も事情を話して、歴史に出来るだけ関わらないように

テオの護衛をしてたんだ。知らないか仮面ヘルソナの守護者って」

「何だと!!貴様が、サウザンドマスター級ナギクラスといわれていた

仮面の守護者だったのか!!!?聞いていた背格好と全然違っぞ!

!?!」

「ああ。それは、『知識の書』の『能力付与薬』のひとつである『年齢変化薬』を使ったんだ」

「年齢詐称薬じゃないのか？」

「これはその名前通り、自分の意思で年齢を操作できるようになる

固有能力を

永久的に得る薬だ。魔法ではないからばれる心配もない。

『能力付与薬』は、補助的なものしかないが、そういう能力を得る薬だ。

まあ、この薬でできることは、あくまで年齢を変えるだけで寿命は変わらないので

俺たちみたいな、『不老』を持つ者や、若作りしたい女性ぐらいしか

使う理由はないだろう」

「……………もう私は驚かないぞ」

「話に戻るぞ？仮面の守護者」俺と知っているのは、

アラルブラ紅き翼とテオとウエスペルタティア王国のアリカ王女

だけだ。あ、紅き翼でもタカミチは知らないけどな。」

「ちょ、ちょっと待て！！なぜそこで、死んだはずの

『災厄の魔女』が出てくるんだっがっ！！」

ドゴンッ

アギは瞬時にエヴァの首を？みそのまま壁に叩き付ける。

「ガハッ！！……………な……………にを……………す……………る」

エヴァはアギに掴まれたまま睨み付けるが、アギは、それ以上にエヴァを睨んでいる。

「マスター！！！！」

茶々丸が動くこうとするが、アギがそれを手で制す

「……………アリカを……………母さんとその名で呼ぶんじゃねえ」

アギは、声こそ小さいが低くドスの利いた声を出す

「！！！！？……………どう……………い……………う……………こと……………だ」

「……事情は話してやる。二度と母さんをその名で呼ばないと誓うと領け」

アギがそういうとエヴァは必死に首を縦に振る。

アギは首を離した。

「げほっ！ぐふっ！」ほっ！」

「マスター！！」

「……すまん頭に血が上ってしまった」

「……いや、いい。知らずとはいえ、私もおまえのタブーを言ってしまったようだからな

こちらこそすまなかった」

「ああ。ありがとう」

「……仕切りなおす。茶々丸、紅茶を二人分用意してくれ」

「承知しました」

第五話 説明（前編）（後書き）

説明だらけの話になりましたね

茶々丸空気

アギは、アリカのしたことを誇りに思っています

タイムマシンの件は、いつか番外編で出そうと思います

変換ミスや文字抜けがあれば教えてください

第六話 説明（後編） & 旗立（前書き）

連投（（（

## 第六話 説明（後編） & 旗立

「さて話してくれるか？」

エヴァはアギが落ち着いたのを見計らって話しかけた

「ああ……。紅き翼は完全なる世界の<sup>「コスモエンテレケイア</sup>

本拠地で、奴等を倒した。だが、それが少し遅かった。『世界を終わらせる儀式』は

完了してしまった。反魔法場が広がるうとしていた。母さんは、世界が滅ぶのを防ぐため

オステイアごと、反魔法場を封印した。そのせいでオステイアはおちてしまった」

「……」

エヴァは何も言わず聞いている

「母さんは、苦渋の思いで世界のために、自分の国を滅ぼしたんだ。オステイアの民も、ほとんど救った。母さんは、むしろ世界に誇っている

ことをしたんだ。なのに……。メガロメセンブリア元老院の糞爺共は

自分達の手柄がないために、母さんを、完全なる世界の黒幕で戦争を起こし、

自らの国を滅ぼした『重戦争犯罪人』に仕立て上げた。」

「……」

「紅き翼が処刑寸前に助けた。映像だけは、流れていたのだから、世間的には死んだことになっている」

「……そう、か。改めて謝ろう。さっきのことはすまなかった」  
エヴァはアギに対して頭を下げた

「もう良いって言っているだろう。暗い話は、これまでにして本題に戻るぞ。」

俺が仮面の守護者だったということまで話したよな？」

「ああ」

「母さんを助けた後に、俺の正体について話してから。ラカンたちと戦ったりしながら俺がタイムマシンで消えた日まで待っていて消えた日に戻ってきて、消える前の日々をそのまますごして、ここにいるというわけだ。」

「………ひとつ聞いていいか？」

「なんだ？」

「なぜ、私にあの、へたすれば世界混乱級の情報を話した？」

私は『悪の魔法使い』なんだぞ」

「俺は、世論に惑わされない。自称・正義の魔法使い共のように世界の敵。自分の敵とは判断しない。俺の敵は、身内を傷付ける奴と

人の命をなんとも思わない下種野郎だけだ。」

「質問の答えになっていないぞ」

「俺は、お前が気に入った。ついでにいえば、家族になりたいと思

っている」

「な、なんだ。プロポーズか！？¥¥¥¥」

「違うが、ある意味違わない。俺もお前も不老不死だからな  
ともに歩きたいと思っている」

「ほう。わたしがさっき言っていた下種野郎だとは思わないのか？」

「思わない。お前の目は澄んでいるし、今までの会話で  
優しい子だというのもわかっている」

「優しいだと！！私は今まで何人も人を殺してきたんだぞ！！！！？」

「それも仕方がなかったんだらう？」

「なにい！！」

「お前の外見は、明らかに10歳前後だ。そんな年の子が吸血鬼、  
ましてや真祖の  
術式なんか知ってるわけがない。知っていたとしても、自分に使  
おうとする

なんてありえない。つまりおまえは被害者だ。

さらに、『吸血鬼は存在するだけで害悪』ってのが特に強かった  
時代だ

襲ってくる奴らを倒しているうちに、賞金が上がっていったんだ  
らう。

つまりおまえは、真正銘の被害者だ。

賞金なんか、被害者面した自称・正義の味方が出したものに過ぎ  
ない」



「……………なぜ……………そう断言できる。力に溺れた殺戮者  
かもしれないんだぞ?…」  
エヴァは俯きながら震える声で俺に言った。

「さっきも言ったとおり、お前の目は澄んでいる。そんな奴ができ  
る目じゃない

だからこそ、お前は被害者だ。」

「……………うつ……………くう……………ひつく……………」

泣いている……………!?なんでだ!?俺何かしたk……………違う。  
そういえば、理解してくれる人がいなかったんだっけな……………

「……………もう一度言う。お前は、被害者で優しい子だ。誰がなんと  
言おうと

俺はそう断言する。俺がお前を認めてやる。お前がなんと言おうと  
ずっとそばにいて支えてやる。泣きたかったら泣け、俺はお前を

裏切らないと誓おう。」

俺がそう言つと

「……………う……………わあああああああああああああ」

エヴァは俺に抱きつき泣き叫んだ。

俺はエヴァの頭をなでていた

・  
・  
・  
・  
・

俺たちは、エヴァが泣き止んでから、別荘を出てご飯を食べている。  
「……………う……………その……………取り乱してすまなかった／＼／／／」

「大丈夫だ。かわいかったから」

「わ、忘れる!! / / / /」

ドカッ

「グフツ!」

・・・殴られた。

「で、俺はどうすればいいんだ?」

「何がだ?」

「いや、結局俺を泊めてくれるのか?」

「・・・・・・」

どうしたんだ?

「あ、あれだけのことを言われて、泊めない訳にもいかないだろう  
/ / /」

「サンキュー。で、早速寝たいんだがどこの部屋を使えばいい?」  
俺は、食い終わったので、疲れてるし寝ようと思いついた。

「茶々丸、案内してやってくれ」

「わかりました。ではアギ様、こちらへ」

「ああ、わかった。それと茶々丸、飯美味しかったぞ」

「ありがとうございます」

俺は、その後茶々丸に案内された部屋で眠った。

S I D E エヴァ

夜、私は屋根に腰掛けて、グラス片手に三日月を見上げている

「ふふん。．．．親の次は子か。．．．私は意外と気が多かつたんだな。クッククック」

自嘲し、笑う

「アギ・スプリングフィールド、必ずおまえを私のものにしてやる」  
私はそう言い、三日月に手を伸ばし掴む様に手を丸める。

第六話 説明（後編） & 旗立（後書き）

はい、エヴァフラグ立ちました。

変換ミスや、文字抜けがあったら言うてください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9498k/>

---

魔法先生ネギま!? 雷蛇

2010年10月14日09時41分発行